談説法」は事実上禁止され、そのことが「節談説教」の衰退の大きな原因になったことと、演説・講演の聴衆の変化についても考える必要があることが指摘された。岩田報告には、高輪仏科大学の廃止は、明治三六年に明如宗主が遷化し、鏡如（大谷光瑞）が西本願寺の宗主を継承したことが教団の学制方針の変更に大きな影響を与えたことと、高輪仏科大学の教員の給料が膨大であったことも廃止の一因であったとのコメントが寄せられた。大谷報告については、丙午出版社の出版活動は中流階級を対象とし、その啓発をめざした新仏教運動との共通点があるのではないかと、との指摘がなされた。赤松氏のコメントは、各報告者の研究対象を時代の変遷や具体的な状況との対応の中で動態的に把握する必要性があり、また、仏教をめぐる従来の伝統や新たな動向との関係の中で重層的に検討することの重要性を報告者たちに示したものであった。

また、フロアからは、「仏教演説」の通仏教的な主張の背景、その理念と実践のずれ、「知識人教化」の「知識人」の具体像（星野報告）、高輪系教職員らが中心となって結成した真宗本派同志会その後の動向（岩田報告）、江戸時代の談林での教科書販売と丙午出版社の教科書販売の共通性と違い（大谷報告）等について、多くの質問や意見が寄せられた。

各報告者が取り上げたトピックや対象は先行研究でも取り上げられることはあったが、「明治仏教とメディア」の分析というテーマは新たな視点であり、明治仏教史の上書き・保存による当該分野の更新に向けての手ごたえと多くの課題を感じたパネルとなった。

地域社会における慰霊顕彰の伝統と現在

代表者 孝本 貢

コメンテータ 土居 浩

司会 村上興匡

近世農村における慰霊顕彰

清水 克行

本報告では、中世～近世移行期（一六世紀後半～一七世紀前半）の日本列島各地で行われた鉄火起請（争っている当事者同士が焼けた鉄片を握って、火傷の有無で勝敗を決定する神明裁判）を具体的な素材として、近代日本の「戦争死者慰霊祭祀」の基礎となったであろう社会実態と思想を、前近代社会のなかを探ってみたい。

鉄火裁判について、報告者は現時点で約四〇件の事例を確認しているが、それらは一五五六～一六六〇年の約一〇〇年間に集中して確認され、なかでも一六〇〇～一六一〇年に流行のピークを迎えることが指摘できる（領主側から発案されたものか、村落側から発案されたものか、については研究史上でも見解の対立がある）。地域分布は、北は陸奥仙台、南は肥前大村にまで確認され、当時、ほぼ列島各地で実施されていたと考えられる。また、鉄火裁判は犯人探し型と紛争解決型の二類型に区分できるが、とくに紛争解決型鉄火裁判の場合、当該期に多

パネル

発した村落間の山争い・境界争いなどに決着をつけるために採用されることが多かった。この時期に鉄火裁判によって確定された村落間の境界は近代以降も尊重され続けている例がほとんどであり、また鉄火を握ることになる村の代表者（村落間紛争の犠牲者）は、勝利した場合、村の「義民」として、ながく顕彰されることとなった。

二〇〇八〜二〇〇九年に現地調査を実施した結果、茨城県つくばみらい市・大阪府泉佐野市・栃木県下野市・滋賀県日野町・福島県西会津町・滋賀県高島市など、全国各地に鉄火裁判の伝承が残され、鉄火の取り手のために後世の人々が建てた慰霊碑も少なからず現存していることが確認できた。ほとんどの慰霊碑は近代以降に子孫や地域の人々によって建てられたものであるが、これらは近世の村の地位を獲得した功労者と史実の存在が近代に再認識されたものと評価することができる。

しかし、史料から確認できる現実の鉄火裁判では、当事者たちが勝敗について合理的な解釈を加えている事例が多く、場合によっては鉄火裁判自体が神明裁判というよりも度胸試しになっている事例も見える。また、当時から闇雲に鉄火裁判が採用されたわけではなく、まず地域的な紛争調停システムが作動し、それが破綻した場合、鉄火裁判に移行する傾向にある。ここから、神明裁判とはいえず、鉄火裁判については当時の人々の素朴な信仰心だけでは説明できず、むしろ当事者のあいだには神仏の権威を利用しようとする合理的な精神すら見出すことが可能である。

とくに注目されるのは、鉄火の取り手に対する村の処遇であ

る。誰もが嫌がる、この役目には、「村の扶養者」を人身御供とし、村人たちが彼ら弱者にその役割を押し付けていた形跡が濃厚である。ただし、そのかわりに鉄火の取り手に対しては、村が二代にわたって公事を免許したり、勝利した場合には田地を給与するなどの手厚い補償措置がとられていた。鉄火を取ると火傷で重い障害を負い、農作業が不可能になることから、場合によっては、鉄火の取り手自身が六代にわたる補償を村に求めるという事例すら見える。

以上のように、中世〜近世移行期の鉄火裁判の背後には、村の存続のための様々な配慮があったことがうかがえる。鉄火裁判の伝説が近代にいたるまで語り継がれ、鉄火犠牲者に対する慰霊顕彰行為が長く存続した背景には、こうした近世以降の地域社会の自律的な動きがあったものと考えられる。近代国民国家期の戦争死者慰霊祭祀の問題を考えようとするときも、以上に述べたような、地域のために犠牲になった者を地域社会として慰霊顕彰する、近世村落社会における伝統を踏まえる必要があるだろう。

近世武士社会における慰霊顕彰

森 謙 二

福島県伊達市月館町で「大位牌」なるものを見た。三池・立花家が下手渡藩に転封されたとき、三池から運ばれてきたとい